

スタンフォード大学

フーバー研究所研究ガイド

岩谷 将

はじめに

本稿は筆者が二〇一二年秋より一年間滞在したスタンフォード大学フーバー研究所について、その概要を紹介するものである。なお、筆者の専門領域の関係で、紹介する内容が中国関係を中心としたものになることをあらかじめお断りしておきたい。

フーバー研究所

〈フーバー研究所の歴史・概要〉

フーバー研究所はカリフォルニア州北部のベイエリアに位置するスタンフォード大学内にあり、大学の一機関に位置づけられている。フーバー研究所の歴史は第三一代アメリカ合衆国大統領ハー

命・平和に関するフーバー研究所および図書館」に改称された。現在の名称である「戦争・革命・平和に関するフーバー研究所」に改称されたのは、現在の研究所の基礎をなす基金が募金された翌年の一九五七年のことである。

研究所は主として研究部門と史料部門に分かれている。研究部門は共和党系のシンクタンクであり、二〇一三年四月に逝去するまでマーガレット・サッチャー元イギリス首相が名誉研究員を務め、その他著名な研究員としてジョージ・シュルツ元労働長官・財務長官・国務長官、コンドリーザ・ライス元国務長官、ウイリアム・ペリー元国防長官などが在籍し、研究員には兼務者も含め一五〇名程度が名を連ねている。

〈アーカイブ概要〉

史料部門は史料館と図書館からなっており、主として戦争・革命・平和に関する史料を重点的に収集している。史料館では約六〇〇〇のコレクションを有し、文書総数は約五〇〇万枚に達する。そのほか、政治ポスター・パンフレットなど一二万点を所蔵している。また、図書館には図書九〇万冊が所蔵されており、他機関に所蔵が

確認されない稀覯書が多数を占めている。

史料館のコレクションとして近年取得されたもののうち、有名なものに旧ソ連共産党・ソビエト国家機密文書集成 (Archives of the Soviet Communist Party and Soviet State Microfilm Collection)、『蒋介石日記などがあり、そのほか日本に関する著名なコレクションとしてはホーンベック (Stanley K. Hornbeck)、『フェラーズ (Bonner Frank Fellers)、『日本近代史手稿コレクション (Japanese Modern History Manuscript Collection) などがある。日本近代史手稿コレクションは様々な文書から構成されるが、荒木貞夫 (陸軍軍人・陸軍大臣)、入江俊郎 (法制局長官)、篠田治策 (李王職長官、京城帝国大学総長)、濱田徳海 (興亜院事務嘱託・支那派遣軍司令部顧問)、平沼騏一郎 (司法大臣、枢密院議長) などの文書が収められている。

中国関連でいえば、蒋介石 (Chiang Kaishek: 以下登録英文名)、『宋子文 (T. V. Soong)、『孔祥熙 (H. H. Kung)、『張公権 (Chiang Kianguan)、『程天放 (Cheng Tianfang)、『黄郛



フーパー・タワー

(Huang Fu) 曾琦 (Zeng Qi) 阮毅成 (Ruan Yicheng) 馬樹礼 (Ma Soo-Lay) 張厲生 (Zhang Lisheng) 徐道鄰 (Xu Daolin) 嚴立三 (Yan Lisan) 張敬海 (Chang Hsin-hai) 黄杰 (Huang Jie) 黄鎮球 (Huang Cheng-chiu) 胡世澤 (Victor Hoo) 顏惠慶 (Yen Hui-ching) 梅貽琦 (Mei Yiqi) 張君勱 (Zhang Junmai) などがあり、関連する人物としては著名なところではヤング (Arthur N. Young) カリー (Lauchlin Bernard Currie) スティールウエル (Joseph Warren Stilwell) シェンノート (Claire Lee Chennault) ウェデマイヤー (Albert C. Wedemeyer) などその他多数の関連文書がある。また中国国民党文化伝播委員会党史館所蔵の文書のうち、中央執行委員会常務会議・政治会議、最高国防会議、国防最高委員会などの会議文書（ただし速記録などは

含まず、国民党党史館とまったく同じではない）ならびに蒋介石の写真・原稿などを集めた総裁檔案 (Zhongguo guo min dang records) 等を所有している。中国共産党については主として建国後の内部文書・刊行物などを集めたコレクション (Zhongguo gong chan dang issuances) 農業関連のコレクション (Chinese agriculture collection) などがあ

る。史料館の利用者は一日平均一五人程度であり、そのうち約四分の一は蒋介石日記を閲覧している。近年フーパーでは中国関連コレクションの充実に力を入れてきたが、量の面からいえば、実のところ中国語コレクションは全コレクションの五%に過ぎない。全体的な評価からいえば、第一次大戦関係、ロシア関係、現代アメリカ軍政関係が主要なコレクションを構成している。

〈利用・閲覧 (二〇一三年時点)〉

開館時間は午前八時一五分から午後四時四五分である。閲覧に際しては登録が必要であり、写真付きの身分証明書 (パスポート) を持参すれば即時閲覧証が発行される。コレクションについてはオン

ラインでも検索することができる (<http://www.hoover.org/library-and-archives>)。なお、閲覧室にはテーマや国別のコレクションリストが備え付けてあり、それらを参考にすることもできる。また、コレクションによっては細目が記された Finding Aids が作製されており、それらの電子データは Online Archive of California (<http://www.oac.cdlib.org/>) から入手できる。

コレクションのリクエストは九時、一〇時半、一一時半、一三時半、一五時の五回で、閲覧室前方備え付けのリクエストフォームに記入し、請求用の箱に入れておけば、時間ごとに閲覧室に搬入されてくる。なお、一度に請求できるのは一〇箱までである。ただし、Finding Aids がないコレクションについては一八箱まで請求できる。請求した箱は閲覧室前方右手の大きな書架に並べられる。また、閲覧台に持ち込めるのはその内の一箱で、閲覧を終える毎に返却・交換する必要がある。閲覧に際して箱から出せるのは一フォルダのみである。なお、請求と返却は一箱ずつでも可能であり、いくつかのコレクションから同時に請求す

ることもできる。その際、一〇箱を超えてはいけないことと、リクエストフォームはコレクション毎に記入する必要があることに注意が必要である。また、蒋介石日記とその他のコレクションは同時に請求できるが、同時に閲覧はできないことも知っておく必要がある。

コピーは各コレクションにつき、一学年度 (九月一日を開始日とする年度) 一〇〇枚まで可能で、一〇〇枚を超える場合は別途申請が必要となり、最大で四〇〇枚と定められている。コピー機は一台しかなく、一度に利用できる時間は五分までに制限されている。料金は一枚一五セントで、図書館で販売しているコピーカードと現金 (硬貨と一ドル・五ドル紙幣) が利用可能である。マイクロリーダーは別に数台あり、こちらにも国民党文書、旧ソ連共産党・ソビエト国家機密文書集成を除いて印刷が可能である。制限についてはコピー機の複写と同様である。また、近年カメラによる撮影も許可され、大多数の閲覧者はカメラによる撮影を行っている。枚数に関する制限はコピー機・マイクログと同じであり、またカメラ以外の

三脚などの持ち込みは禁じられている。その他、マイクロについては印刷不可のものを除いて直接PDF化してデータ保存することが可能となり、利便性が飛躍的に向上している。

〈蒋介石日記について〉

蒋介石日記は二〇〇四年にフーバー研究所に寄託され、二〇〇六年から順次公開が開始されて以来、史料館におけるもつとも閲覧者の多い史料であり続けている。日記の公開に対するフーバー側の強い要望と当時の台湾における民进党政権の状況を踏まえ、フーバーに寄託されることとなった。

蒋介石日記は他のコレクションとは別に管理されており、今年からは筆記具の持ち込みも禁止されている。筆写に際しては史料館が指定する用紙と鉛筆を利用しなければならぬ。リクエストは「箱」ではなく、フォルダ単位（すなわち一カ月ごと）でしか閲覧することができず、逐一返却と借り出しを行わなくてはならない。

閲覧できる日記は原本ではなく、マイクロ撮影したものを緑色の紙にモノクロ印刷したものである。年によっては原本の傷みが激しいことに加え、ピンぼけがひど

いページや、真つ黒ではほとんど判読できないページもある。また、モノクロで印刷されているため、訂正部分が罫線と重なり判読が困難な箇所がある。日記は無標点の行書体で書かれており、人名は基本的に字で記されている。癖のある崩し字などはあるものの、日記としてはかなり読みやすい部類に入る。年によって差はあるが、およそ毎日二〇〇字程度の分量に加え、週ごとに先週の反省と来週

の予定が記され、月ごと、年ごとに同様の反省と予定が記されている。一九三〇年代前半までの日記は分量も少なく、反省などの項目もないが、日中戦争以降分量は徐々に増加していく。日記の体裁は時期によって例外があるものの、基本的には提要、予定、注意からなっており、注意に自身の観察や考えを述べるものが多く、日記を編集した書籍に用いられるのはこの項目であることが多い。

日記の出版を巡っては公開後から幾度となく取りざたされてきたものの、一部の遺族の反対から現時点でも目途はたっていない。ただ、遅くとも死後五〇年目にあたる二〇二五年には出版される見通しで、おそらくはそれ以前に出版

の問題は解決される可能性が高い。

また、最近では所有権の確定ならびに日記原本の移管等について、スタンフォード大学と寄託者との間で話し合いが持たれているものの、現時点では引き続きフーバー研究所に寄託される可能性が高い。仮に原本の帰属先がフーバー研究所以外に変更となった場合においても、フーバー研究所での日記複本の閲覧は続けられる予定である。

〈フーバー研究所図書館〉

図書館については、その蔵書のほとんどが稀覯書、あるいは希少な文書からなっている。日本に関しては戦後すぐに東京事務所を置き、戦争にかかわる官公庁の文書、書類級、内部刊行物を収集した。東京事務所はウイロビーンGHQ参謀第二部部长やマッカーサー元帥副官フェラーズの協力を得て、一九四五年一月にスタンフォード大学の卒業生である東内良雄を所長として東京都神田駿河台に設置された。一九四六年三月から資料の発送を始め、その後五年間で一四六八ケース、約五〇〇〇点の資料が発送された。日本関連資料の多くは右上にTokyo Officeとス



スタンフォード大学

タンブが押しであり、大部がこの事務所を通じて収集されたことがわかる。また、米軍が接収した資料のうち、重複したものもフーバー研究所に寄贈され、蔵書の一部となっている。資料は発行機関からみると外務省、陸軍、満鉄、興亜院などのほか、新民会、大陸調査会、日森研究所など、国内各図書館に所蔵が少ないものも多い。これら日本コレクションは現在全てスタンフォード大学東アジア図書館に移管され、別館に保存されている。

中国に関する史料は初代中国コレクシオン担当キュレーターとなるメアリー・ライトが一九四六年

から一九四九年にかけて北京に拠点を置き、上海、重慶、南京、ウルムチ、広州、台北、香港、延安などに赴いたり、代理人を置いてりして収集した。その際に収集した中国共産党関連の史料は、戦後台湾から入手した陳誠文庫（一九三〇年代に国民党が鹵獲した史料）とともに一九三〇〜四〇年代の共産党を知るうえで貴重かつ重要な資料となっている。また、一九四六年には当時の国防最高委員会副秘書長の梁寒操から日中戦争期の中国政治・軍事にかかわる大量の文書、刊行物がフーバー研究所図書館に寄贈されたことも、フーバー図書館における豊富な近代中国関連資料の蓄積に寄与した。一九四九年の中華人民共和国成立後は主として香港・台湾を通じて収集を継続し、国民党・軍に関連する資料とともに、中国革命・中国の軍事・政治に関するユニークなコレクションを形成している。また、戦後部分では国民党政権による大陸情報が貴重な史料群となっており、国民党関連史料は世界屈指のコレクションとなっている。

●東アジア図書館

スタンフォード大学の図書館は二六の図書館から構成されており、六〇〇万冊の図書、三〇万種類の雑誌・定期刊行物、六〇〇〇種類の新聞を利用することができ

る。東アジア言語の図書は東アジア図書館と別館に集中配架されている。東アジア図書館はマイヤー図書館 (J. Henry Meyer Memorial Library) の四階にあり、閲覧希望者はマイヤー図書館の向かいにあるグリーン図書館 (Cecil H. Green Library) を一日閲覧証を



グリーン図書館

発行してもらう必要がある。閲覧証の発行にはパスポート等の写真付き身分証が必要となる。スタンフォード大学に収蔵されている日本語文献は一四万件（収蔵数で第八番目の言語）、中国語文献は二六万件（六番目）、韓国語文献は三万件（一四番目）となっている。これは元来スタンフォード大学で東アジア言語を重視してきたことと、フーバー研究所図書館の日本語の全て、および中国語の大部分の図書が全て東アジア図書館に移管（現在は別館に別置）されたことと由来する。したがって、東アジア図書館と別館ではほぼ全ての東アジア言語資料が利用できるようなっている。これら図書は全て開架式で自由に閲覧できる。

スタンフォード大学の東アジアコレクションの特徴は、第二次大戦中に刊行されたものが多いこと、軍事・政治・外交関連の資料が多いこと、内部刊行物が多いことにある。これはコレクションの大半がフーバーから移管されたもので構成されていることと関連している。戦時日本の公官庁による刊行物は戦後の混乱で焼却・廃棄されたため、本学コレクションにしかない孤本が多くある。中国関

連についても第二次大戦後の内戦で多くの刊行物が失われたため、フーバーにのみ存在する資料が多く、貴重なコレクションとなっている。

●おわりに

筆者は主として日中戦争関連の史料調査・収集のため、二〇一二年秋より一年ほどフーバー研究所に滞在した。しかしながら、フーバー研究所が所蔵する史料は非常に多く、ここに述べた概略を把握するだけで多くの時間を費やしてしまった。先学諸氏が新たにフーバーで調査を実施するうえで、この小文が多少なりとも準備に費やす時間を省き、必要とする史料にたどり着く一助となれば幸いであり、一層の研究の促進と深化を願ってやまない。

（いわたに のぶ／防衛省防衛研究所戦史研究センター主任研究官）